

詩を書く友人と冬の夜道を歩いていたとき、裸になつたイチヨウの大木を見て、「恐竜みたいだ！」と搔きぶられたように言う。歌を詠む老人と小船で釣りをしているとき、「オツ、ホトトギスが鳴いた」と空に向かって言う。生け花を習っている女性が、「私は諸葛菜（花大根）の花が好き」と何気に言う。

これら、どうってことのない言葉だが僕には残る。なぜなのか。発する人、言葉に力があるのだと思う。思わずほとばしつたり滲み出る言葉。真実と言つてもいい。こんな言葉にどれだけ出合つてきただろう。

雜談はあっても、語り合ふといふことが薄くなつた時代。冗舌でなくとも、ボンと人が放つ言葉、投げ掛けられた普段の言葉に敏感でいたい。どうぞ、言葉と文章について語りたい。

言葉と文章

なものには言葉の質からして入つてこない。判断だけの文章はどこか狭苦しい。

引き込まれ、ウーンと唸る。作品が放つ何かに動かされる。作品が放つ何かに動かされる。その何かを知ろうと凝視し、潜考し、真摯に向き合ひながら肉薄する中で、言葉の世界には生きている。

最後に絵に関して少し。絵も作品を通して何かを語つてゐると思われがちだが、僕はしない。言葉にならないものを描こうとしているからだ。それでも見手側には、僕の知らない言葉を掘り起こしてほしいという願望はある。

（吉田 淳治・画家）



もつて問い合わせるように響いてくるものを読みたい。しかし、深く掘り起きて、日頃から自身を耕しておかねばならないのだろう。おぼろげだったものを明確に示してくれたり、思ひもよらぬ見方を教わることで身に付くもの。僕はそんな生きた証しから紡がれる言葉がいい。

過去に僕は、絵かきや彫刻家自身が書いたり語つたりした言葉に惹かれるもの多かった。彼らは文章の世界に生きていなくとも、言葉の世界には生きている。言葉の世界には生きている。